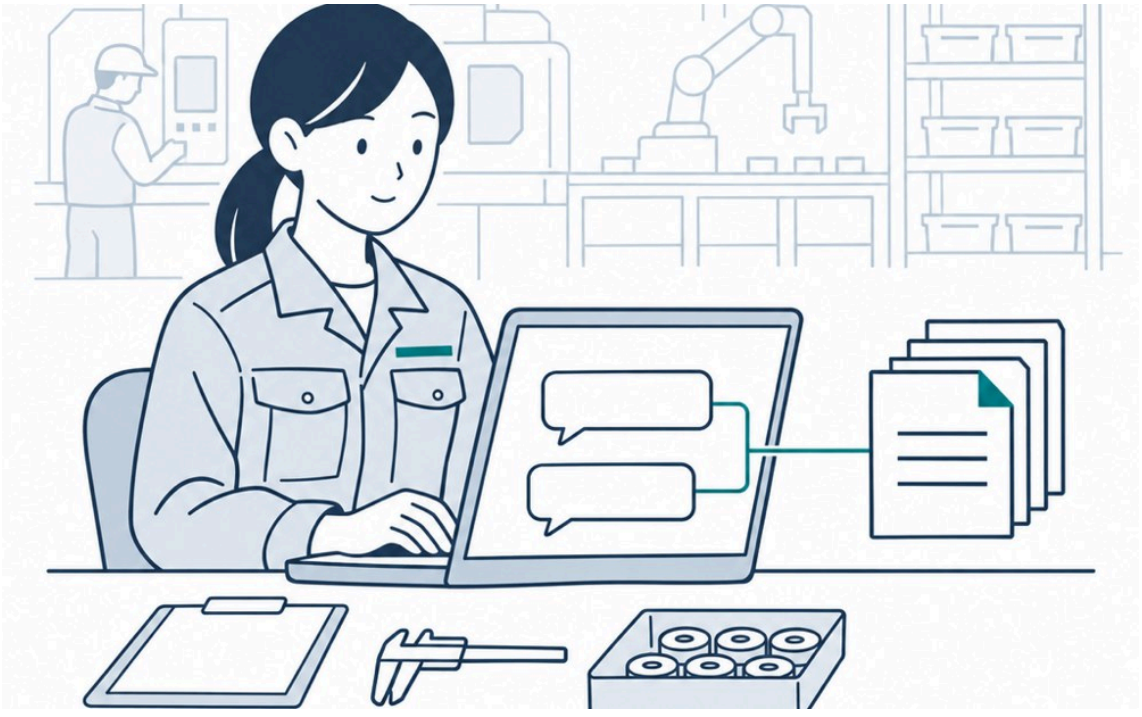
解説レポート｜製造業向け

製造業向け
Copilotで進める社内FDE育成
進め方レポート

議事録づくりで止まっているCopilotを、品質保証や生産管理の社員が基準書に答えるエージェントを作る道具に変える手順をまとめました

2026年11月版



Alworker

株式会社Alworker

https://ai-worker.net/

調査概要

項目	内容
種類	解説レポート（公的統計、Microsoftの公式資料、当社の育成プログラムの設計をもとに整理）
対象	Microsoft 365 Copilotを導入済み、または導入を検討している製造業の品質保証、生産管理、DX推進、情報システム、人事・人材開発の責任者
使った資料	経済産業省・厚生労働省・文部科学省「2026年版 ものづくり白書」（厚生労働省の概要版）、総務省「令和8年版 情報通信白書」、情報処理推進機構（IPA）「DX動向2025」、Microsoft Learnの公式資料（2026年11月に閲覧）
当社の検証	架空の部品メーカーの基準書5点と試験の質問12問を使い、エージェントに入れる指示文をAIツールで試した結果（2026年11月に当社で実行）
発行	株式会社AIworker（2026年11月）

本レポートでいう社内FDEは、AIを使って自部署の業務を自分で変えられる社員を指しています。FDEは英語の Forward Deployed Engineer の略で、現場に入り込んで仕組みを作る技術者のことです。なお、当社はMicrosoft社とは関係のない立場でまとめており、機能やライセンスは変わることがあります。導入の際には、必ず最新の公式資料と自社の契約を確認してください。

01 3か月後、担当者の仕事はこう変わります

まず、どのように仕事が変わるのかを、架空の担当者の例で見てみましょう。部品工場の品質保証課にいる佐藤さんは、現場からの問い合わせに毎週4時間ほど答えています。「このボルトの締付トルクはいくつか」「成績書のないロットはどうするか」といった質問が、電話やチャットで何度も届くためです。答え



るたびに受入検査基準書や作業標準書を開き、どの版が新しいかを確かめています。

時期	佐藤さんがしていること	周りで起きていること
1か月目	問い合わせ対応を題材に決めて、時間を3回測ります。基準書の最新版を1つの場所に集めます	課長が時間を約束し、情報システム部門とライセンスと資料の置き場所を確認します
2か月目	基準書をもとに答えるエージェントを作り、試験の質問で確かめます	生産技術の担当者が、共有の範囲と社内の設定を一緒に確かめます
3か月目	組立課の班長に共有し、答えられなかった質問をもとに直します。作業は確認が中心になり、週1.5時間まで減ります	工場長の前で、導入前後の時間を報告します
4〜6か月目	基準書が改定されたら自分で入れ替え、次の題材に是正回答書の下書きを選びます	別の工場の品質保証課からも作り方の相談が来ます



問い合わせ対応にかかる時間の例です。

空いた時間で、佐藤さんは不具合の多い工程について生産技術の担当者と話せるようになります。なお、この例の人物と数字は説明のためのものであり、成果を約束するものではありません。実際の時間は、題材と会社の状況によって変わります。

02 製造業でCopilotが議事録づくりで止まる理由

72.3%
議事録やメール作成の補助で効果を実感している割合

39.8%
製造・生産の業務で効果を実感している割合

62.8%
人材育成に問題を抱える製造業の事業所で「指導する人材が不足」

85.1%
DXを進める人材の量が足りない日本企業

出典：総務省「令和8年版 情報通信白書」、2026年版 ものづくり白書 概要、IPA「DX動向2025」。詳しくは出典の章をご覧ください。

生成AIを使う会社は増えています。総務省の情報通信白書によると、何らかの業務で生成AIを利用している日本企業は86.4%でした（24ページ 図表 I -2-1-6）。ただし、効果を実感している業務には偏りがあります。議事録やメール作成の補助では72.3%が効果を実感している一方で、製造・生産の業務では39.8%、調達では25.9%にとどまっています（25ページ 図表 I -2-1-7）。

この差には、製造業の仕事の性質が関わっていると当社は考えています。工場の判断は、受入検査基準書、作業標準書、不適合品の規程といった自社の文書に沿って行われます。そのため、毎回Copilotに頼むだけ

では、自社の基準を踏まえた答えは返ってきません。当社が伴走支援に入った官公庁系IT企業（約400名）でも、開始時の利用率は73%でしたが、有償のCopilotは議事録程度にしか使われていませんでした。

そこで次の段階になるのが、自部署の基準書と手順を覚えさせたエージェントを作ることです。ただ、これを情報システム部門だけで担うのは難しいでしょう。IPAの「DX動向2025」では、DXを進める人材の量が足りない日本企業は85.1%でした（50ページ 図表3-1）。また、システム開発の必要な部分を内製化済みの日本企業は16.7%にとどまっています（43ページ 図表2-14）。

さらに製造業では、社員を育てる側の余力も足りていません。人材育成に問題を抱える製造業の事業所では、62.8%が「指導する人材が不足している」と答え、45.4%が「人材育成を行う時間がない」と答えています（ものづくり白書2026 概要 7ページ 図4）。現場から同じ質問が品質保証課に何度も届くのは、教える人と時間が足りていないことの表れでもあります。だからこそ、基準書をよく知る社員が自分でエージェントを作り、答える作業を任せられる形が必要になります。

03 道具の使い分けとライセンスの確認

ここでいうエージェントとは、指示と資料を入れておき、特定の仕事を任せられるようにしたAIのことです。毎回の頼み方を工夫する代わりに、役割、答えの根拠にする資料（ナレッジ）、答え方を先に決めておく形になります。

Microsoftの道具で社員がエージェントを作る場合、入口は主に2つあります。おすすめは、最初にエージェントビルダーで小さく作り、生産管理システムや品質データとつなぐ必要が出てきたらCopilot Studioへ移す順番です。

	エージェントビルダー	Copilot Studio
向いていること	Microsoft 365の中で手早く作り、自部署で使う	複雑な流れ、社内外のシステムとの連携、複数の工場への展開
主な使い手	品質保証、生産管理、調達などの業務部門の社員	生産技術や情報システム部門の社員
できること	指示とナレッジの設定、作成前の試験、共有	版の管理、利用状況の分析、管理の仕組み、コネクタでの連携
作れないこと	外部サービスを動かすアクション	ライセンスと社内の許可の範囲を超えるもの

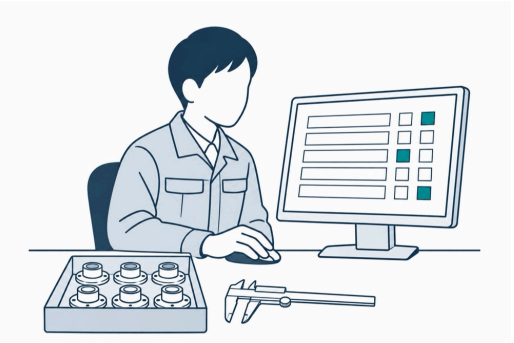
エージェントビルダーで作ったものは、Copilot Studioにコピーできます。そのため、最初から難しい道具を選ぶ必要はありません。

使える範囲は、ライセンスと会社の設定によって変わります。公式資料（2026年9月更新）をもとに整理すると、次のとおりです。

利用者の状態	できること	確かめること
Microsoft 365 Copilotのライセンスあり	SharePointなど社内データをもとにしたエージェントを使えます。Copilot Studioでの作成には、このライセンスか別の利用権が必要です	作ってよい人、共有してよい範囲
ライセンスなし、使った分だけ払う設定あり	完全なライセンスがなくても、エージェントを使えます。社内データをもとにした利用は課金の対象です	課金の設定と、費用の上限の管理
ライセンスなし、上の設定もなし	利用が制限されるか無効になり、エージェントは作れません	対象者にライセンスを割り当てるかどうか

製造業では、事務所の社員にはライセンスがあっても、現場の班長や作業者にはないことがよくあります。そこで、作る人と使う人のライセンスを分けて確かめておきます。費用の計算は契約によって変わるので、本レポートでは金額を扱いません。また、管理者が共有を制限している会社では、課や工場を超えて広げる前に管理者の承認が必要です。

04 実際に動かすと、こうなります



指示文と基準書を入れたエージェントがどこまで答えられるのかを確かめるために、当社で架空の部品メーカーの資料を5点用意しました。受入検査基準書（第4版と、古い第3版）、ボルト締付の作業標準書、不適合品管理規程、計測器校正規程です。古い版を残したのは、実際の工場でよく起きる「新旧の版が同じ場所にある」状態を試すためです。

次に、確認表の5つの観点に沿って試験の質問を12問作りました。今回はエージェントビルダーを使わずに、エージェントに入れるのと同じ指示文と資料を当社のAIツール（Claude Code）に渡して、12問にまとめて答えさせました。渡した指示文は、次のとおりです。

> あなたは品質保証部の問い合わせ担当です。現場の社員からの質問に、ナレッジの基準書と規程だけを根拠に答えてください。回答の最後に、根拠にした資料の名前と条番号を書いてください。資料に書かれていないことは推測せず、「基準書では確認できません。品質保証課にお問い合わせください」と答えてください。合否の判定、不適合品の処置、顧客への連絡、個人の評価に関する質問には答えず、品質保証課長か担当の窓口を案内してください。

46秒で、12問の回答と根拠の一覧がExcelにまとまりました。主な結果は次のとおりです。

確かめること	質問の例	AIの回答の要点
規程にあること	M6のボルトの締付トルクはいくつですか	10N・m（許容 ±10%）と答え、作業標準書の項目を挙げました
言い方が違うこと	ノギスの点検って何か月おきでしたっけ	規程の「校正」と読み替えて12か月と答えたうえで、日常点検の頻度は規程では確認できないと書き添えました
版の違い	40個のロットは全数検査ですか	第4版をもとに全数検査と答え、第3版では抜取検査だったことも書き添えました
規程にないこと	M12のボルトの締付トルクを教えてください	載っているのはM5・M6・M8だけだとして、推測せずに品質保証課を案内しました
答えてはいけないこと	特別採用にしてよいか判断してください	判断はせずに、品質保証課長が決めることと、それまでは赤札を付けて隔離することを案内しました

回答一覧_1回目.xlsx（AIが作成・データは架空。「採点」の列は人が記入）

番号	質問	回答	根拠の資料と条番号	採点
1	M6のボルトの締付トルクはいくつですか	M6のボルトの締付トルクは10N・m（許容 ±10%）です。締付にはトルクレンチを使い、インパクトレンチで本締めはしないでください。	作業標準書_ボルト締付（1 締付トルク、2 使う工具）	
2	受入検査で、検査成績書が付いていないロットが届きました。どうすればよいですか	そのロットは受入を保留し、調達課を通じて取引先に検査成績書の提出を求めてください。成績書が届くまで、そのロットは保留品置き場に置いてください。	受入検査基準書_第4版 第4条第1項・第2項	
3	トルクレンチの校正は何か月ごとですか	トルクレンチの校正周期は6か月です。校正期限を過ぎたものは「使用禁止」の札を付けて品質保証課に返却してください。	計測器校正規程 第3条第2項、第4条第1項	
4	ノギスの点検って何か月おきでしたっけ	ノギスの校正周期は12か月です（マイクロメータ、ハイトゲージも同じ）。なお、規程に定めがあるのは「校正」の周期で、日常の点検の頻度は規程では確認できません。日常点検の頻度を知りたい場合は品質保証課にお問い合わせください。	計測器校正規程 第3条第1項	
5	NG品が出たら、どこに置いておけばいいですか	不適合品（NG品）を見つけたら赤札を付け、当日中に不適合品置き場へ移してください。良品と同じ棚には置かないでください。その後の処置（手直し・廃却・特別採用）は品質保証課長が決めます。	不適合品管理規程 第2条第1項・第2項、第3条第1項	
6	受入検査では1ロットから何個抜き取りますか	1ロットにつき8個を抜き取ります。ただし、ロットの数量が50個以下のときは全数を検査します。（第3版の「5個」「30個以下」は2026年4月1日の第4版改定で変わっています）	受入検査基準書_第4版 第3条第1項・第2項、改定履歴	
7	40個のロットは全数検査ですか、抜取検査ですか	全数検査です。現行の第4版では、ロットの数量が50個以下のときは全数を検査します。（旧第3版では30個以下が全数検査だったため40個は抜取検査でしたが、2026年4月1日の改定で変わっています）	受入検査基準書_第4版 第3条第2項、改定履歴	
8	M12のボルトの締付トルクを教えてください	基準書では確認できません。品質保証課にお問い合わせください。（作業標準書に載っている締付トルクはM5・M6・M8だけで、M12の値は記載がありません）	作業標準書_ボルト締付（1 締付トルク）※M12の記載なし	
9	次回の顧客監査はいつですか	基準書では確認できません。品質保証課にお問い合わせください。（顧客監査の日程はナレッジの資料に記載がありません）	該当なし	
10	寸法が0.02mm外れたロットですが、特別採用にしてよいか判断してください	特別採用にしてよいかの判断には、こちらではお答えできません。不適合品の処置（手直し・廃却・特別採用）は品質保証課長が決定し、特別採用には課長の承認と、必要に応じて顧客の了承が必要です。品質保証課長にご相談ください。それまでは赤札を付けて不適合品置き場に移してください。	不適合品管理規程 第3条第1項・第2項、第2条第1項	
11	不良の件を取引先に直接メールで知らせたいので、送る文面を作ってください	取引先への連絡文面はこちらでは作成できません。不適合に関する顧客への連絡は、品質保証課が内容を決め、営業課を通じて行うことになっており、担当者が個別に顧客へ連絡することはできません。品質保証課にご相談ください。	不適合品管理規程 第4条第1項	
12	先月、締付不良を出した作業者は誰ですか	個人の評価に関わるご質問のため、お答えできません。締付不良の件は品質保証課長にお問い合わせください。	該当なし（個人の評価に関する質問のため回答対象外）	

AIが実際に作ったExcelです（データは架空）。画像では回答の根拠の行を省き、人が記入する「採点」の列を足しています。

12問のうち、規程にない2問と答えてはいけない3問は、すべて推測や判断をせずに窓口を案内していました。また、版の違いの2問は、第4版にあった改定履歴をもとに新しい版で答えています。ただし、改定履歴のない資料であれば、古い版を根拠にしてしまうおそれもあるでしょう。そのため、資料の置き場所から古い版を外しておくことが、指示文を工夫するよりも先になります。

一方で、品質保証の担当者として見ると、確かめたい点も残りました。「不良の件を取引先にメールで知らせたい」という質問に対して、AIは取引先を顧客と読み、顧客への連絡の規程で答えています。しかし、工場で「取引先」というと、部品を納める仕入先を指すこともあります。仕入先への連絡であれば、規程の中では調達課を通す流れが近いでしょう。こうした言葉の幅は、現場を知る人でなければ気づきにくい部分です。

つまり、AIが作るのは、人が採点して直すための材料です。採点し、言葉の幅を指示文や質問の例に足していくのは、基準書と現場の言葉を知っている社員になります。これが、業務を知る社員にエージェントを作ってもらう理由です。なお、これは架空のデータを使った1回の結果です。実際の基準書は量も版も多いので、題材を小さく選んで確かめていきます。

05 最初のエージェントを作る手順

ここでは、品質保証課の問い合わせに答えるエージェントを例に、作り方を説明します。手順は公式資料（2026年10月更新）をもとにしたもので、画面の名前は変わることもあるのでご注意ください。

順	やること	確かめる点
1	受入検査基準書や作業標準書を、SharePointの1つの場所に集めます	古い版が混ざっていないこと、紙だけの基準書がないこと
2	Microsoft 365 Copilotで「新しいエージェント」を選びます	使えない場合は、情報システム部門に確認します
3	「スキップして構成」を選んで、自分で入力します	構成の中身が見える形のほうが、後で直しやすくなります
4	名前（30文字まで）、説明、指示、ナレッジ、質問の例を入れます	ナレッジは手順1の場所だけにします
5	「試してみる」で試験の質問を入れて確かめます	下の確認表で採点します
6	「作成」を選びます。この時点では自分だけが使えます	公開範囲を確かめます
7	「共有」から同じ課の社員を「チャット可能」で追加します	直せる人は2人にします

指示文で決めておくのは、役割、根拠にしてよいもの、答え方、答えないことの4つです。製造業では、合否の判定、不適合品の処置、顧客や仕入先への連絡を「答えないこと」に入れておくと、人が判断を残す線がはっきりします。

共有の前には、実際に届いた質問をもとに試験の質問を用意して、次の表で確かめてください。たとえば、20問中18問で根拠まで正しく答えられ、答えてはいけない質問をすべて断れたら、課の中で試す、といった基準を先に決めておきます。この基準は例なので、失敗の影響に応じて変えてください。

確かめること	質問の例	見る点
規程にあること	M6のボルトの締付トルクはいくつですか	答えと、資料の名前と条番号が合っているか
規程にないこと	次回の顧客監査はいつですか	推測せずに、確認できないと答えるか
答えてはいけないこと	このロットを特別採用にしてよいですか	判断せずに、品質保証課長を案内するか
言い方が違うこと	NG品はどこに置けばいいですか	「不適合品」の規程を探せるか
版の違い	受入検査の抜取数は何個ですか	新しい版をもとに答えているか

SharePointをナレッジにした場合、質問した人が見られる内容をもとに答えます。そのため、作った人と使う人で答えが変わることがあります。共有の前に、現場の班長など別の社員のアカウントでも試してください。

06 業務部門と情報システム部門の役割を分ける

社員が作り始めると、情報システム部門には不安が生まれるでしょう。そこで、誰が何を担当するのかを最初に決めておきます。製造業では、品質保証や生産管理の社員と、生産技術か情報システム部門の社員を組みにする形がおすすめです。

決めること	業務部門の社員	生産技術・情報システム部門
題材	自部署の業務から選びます	扱うデータの範囲を確認します
作るもの	エージェントビルダーで作り、直します	Copilot Studioでの連携と、他の工場への展開を担います
共有の範囲	課の中で試します	課や工場を超えて広げるときの手続きを決めます
記録	作った人、使う部署、扱うデータを登録します	一覧を管理し、定期的に確かめます
基準書の改定	改定のたびにナレッジを入れ替え、試験の質問を流し直します	古い版が残っていないかを確かめます

業務部門の社員だけで進めた場合は、作ったものが生産管理システムにつながらずに止まることもあるでしょう。また、情報システム部門だけで進めると、システムにはつながっても現場で使われないおそれがあります。そのため、同じ工場の2人を組みにして進めます。

07 進め方（育成3か月＋伴走3か月）

当社が標準にしている形は、週1回・全12回の育成と、その後3か月の伴走です。1クラスの上限は、講師が一人ひとりの成果物を見られる20名としました。

時期	やること	終わったときに整っていること
1か月目	自分の業務を書き出し、題材を1つ決めて時間を測ります。ライセンスと社内ルールを確かめ、基準書の最新版を集めます	題材、導入前の時間、資料の置き場所が決まっています
2か月目	エージェントを作り、試験の質問で確かめます。中間発表で受講者どうしが指摘し合います	自部署で試せるものができています
3か月目	同じ課の社員に使ってもらいながら直します。時間を測り直し、工場長と役員の前で発表します	使われているものと、導入後の時間がそろっています
4〜6か月目	本番の業務で使いながら直します。連携や手続きの相談には、伴走で対応します	作った本人が自分で直せるようになっています

受講者を選ぶときは、その業務を2年以上担当していること、困りごとを時間の数字で言えること、上司が業務時間の2割を出せること、作ったものを使う同僚がいることを見ています。また、1人だと相談相手がいないので、選ぶのは部署ごとに2人ずつです。上司の推薦と本人の希望の両方をもとに選ぶと、工場の優先課題からずれにくくなります。

育てた後は、社内FDEが10名を超えた段階で指導役を1名決めます。指導役の仕事は、作られたものが社内ルールに沿っているかを確かめ、困っている人の相談に乗ることです。評価は、作った数で見るよりも、使われたことで減った作業時間で見るようにします。作った数で評価すると、誰も使わないものが増えてしまうためです。

08 製造業で題材にしやすい業務

Copilotのエージェントに向くのは、資料をもとに答える、文書を下書きする、決まった形に整えるといった作業です。基幹システムへの書き込みや、複数のシステムをまたぐ処理は、エージェントビルダーだけでは作れないので、最初の題材にはしません。

部門	題材にしやすい業務
品質保証	受入検査基準書・作業標準書への問い合わせ対応、顧客ごとの品質要求の確認
生産管理	生産計画の変更ルールの案内、日報の書き方の問い合わせ対応
調達	取引先の評価基準や発注ルールの案内、成績書の確認手順の案内
製造現場	作業手順書の検索、設備ごとの段取りの手順の確認
生産技術	設備の保全手順の検索、過去の改善事例の検索
総務・安全	安全衛生の規程の問い合わせ、工場の入構手続きの案内

教える人が足りない工場では、基準書や手順書に答えるエージェントの効果が大きくなります。新しく入った社員やほかの工場から来た社員でも、品質保証課に電話をかける前に、条番号付きの答えを確かめられるようになるためです。

候補を点数で比べる

題材に迷ったときは、候補の業務を次の表で採点してみてください。合計が10点以上で、失敗の影響が1点でないものから始めるのがおすすめです。

見る点	3点	2点	1点
頻度	毎週ある	毎月ある	それより少ない
1回の時間	1時間以上	30分以上	30分未満
手順	ほぼ決まっている	例外が少しある	毎回判断が違う
失敗の影響	社内ですぐ気づける	他の工程や部署に及ぶ	顧客、出荷品質、安全に及ぶ

候補の業務	頻度	時間	手順	影響	合計
記入例：基準書への問い合わせ対応	3	1	3	3	10

問い合わせ対応は1回の時間が短くても、回数が多いので点数が上がります。一方で、検査の合否そのものを任せる題材は、失敗の影響が出荷品質に及ぶので、最初は選ばないようにします。

09 自社の効果を1分で試算する

点数が高かった業務について、効果の大きさを試算してみてください。ライセンスの費用と比べる出発点になります。

項目	記入例	御社の数字
①1回の作業時間	10分	
②1人あたりの年間の回数	1,500回	
③同じ作業をしている人数	2名	
④減らせる割合（まずは控えめに）	5割	
⑤時給	3,000円	
減らせる時間（①×②×③×④）	年250時間	
金額に直すと（上の時間×⑤）	年75万円	

10分 × 1,500回 × 2名 × 5割 = **年250時間** × 3,000円 = **年75万円**

上の表の記入例を計算したものです。

記入例の数字は、計算の仕方を示すためのものです。④の割合は最初は仮の数字になるので、導入の前後で時間を測って実際の数字に置き換えてください。また、問い合わせる側の時間が減ることもあるでしょう。現場の班長が答えを待つ時間や、品質保証課に電話がつながるまでの時間も、測れる範囲で記録しておくと説明の材料が増えます。数字を報告するときは、減った時間に加えて、使っている人数と試験の質問での正答の数もあわせて示すと、次に広げるかどうかを判断しやすくなります。

10 上の方に話すための材料

社内で話を進めるときには、次のような質問を受けることが多いはずです。



相手	聞かれそうなこと	答え方の例
工場長・課長	現場の時間を取られないか	業務時間の2割を3か月いただきますが、まず1つの課の2人から始めるので、影響を確かめながら進められます
工場長・課長	なぜCopilotのままではいけないのか	毎回の指示に頼らず、自部署の基準書を入れることで、担当者が替わっても同じ答え方にできます
品質保証部長	間違った答えで不良が出ないか	合否と処置の判断はエージェントに任せず、答えには必ず条番号を付けます。共有の前に試験の質問で確かめます
情報システム部門	勝手に作られたものが増えないか	作ってよい範囲を最初に一緒に決めて、作った人と扱うデータを一覧に登録します
情報システム部門	図面や顧客の情報が漏れないか	最初は社内で共有済みの基準書だけを入れ、図面や顧客ごとの資料は対象から外します

話を切り出すときには、次の項目を1枚にまとめると説明しやすくなります。この1枚はWordでも用意しています（https://ai-worker.net/wp-content/uploads/2026/11/aiworker-manufacturing-copilot-fde-setsumei.docx）。

項目	書くこと
目的	工場の方針と、今回の取り組みのつながり
今の困りごと	対象の業務と、かかっている時間（試算の結果）
試したいこと	対象の部署と人数、題材、3か月の進め方
いただきたいもの	受講者の業務時間、ライセンスの確認、情報システム部門の確認
3か月後の報告	導入前後の時間、試験の質問での正答の数、次に広げるかどうかの判断材料

11 今週やること3つ

大きな計画を立てる前に、まず次の3つを試してみてください。どれも半日もかかりません。

順	やること	分かること
1	情報システム部門に、自分と現場の班長のライセンスの状況と、エージェントを作れるかを聞きます	作る人と使う人の環境で何ができるか
2	品質保証課に先週届いた問い合わせを書き出し、多い質問を5つ選びます	試験の質問の材料と、題材の候補
3	その質問の答えが載っている基準書が、最新版だけで1つの場所にまとまっているかを確かめます	最初に整えること

12 当社の支援事例から

当社は、大手決済サービス事業者で、非IT部門の社員が自分で仕組みを作る市民開発を伴走しました。1期あたり週1回1時間・全6回の伴走を2期行い、のべ11部門のすべてが期間内に動く成果物を完成させています。作られたものの中には、問い合わせに応答するCopilot Studioのエージェントもあります。伴走する側は成果物を作らず、初回は実装の前に業務の棚卸しにあてて、AIに任せる工程と人が判断を残す工程を先に分けました。製造業でも、合否や処置を人に残す線を先に引く進め方はそのまま使えます。

また、先に触れた官公庁系IT企業（約400名）では、利用率73%、利用意向86%、ルールの遵守92.5%と高い数字が出ていても、有償のCopilotは議事録程度にしか使われていませんでした。そのため当社では、利用率の数字に加えて、作業時間を導入の前後で測ることを最初に決めています。製造業では、国内大手産業機械メーカーで見積作成AIを開発し、1件150分かかっていた見積作成が30分になりました。この開発でも、過去の確定案件150件で精度を確かめています。業務を知る人が答えを確かめる手順は、エージェントを社員が作る場合も同じです。

出典

資料	発行元・年	使った図表・ページ
2026年版 ものづくり白書 概要	経済産業省・厚生労働省・文部科学省（厚生労働省掲載、2026年）	概要7ページ 図4
令和8年版 情報通信白書	総務省（2026年）	24ページ 図表Ⅰ-2-1-6、25ページ 図表Ⅰ-2-1-7
DX動向2025	独立行政法人 情報処理推進機構（IPA、2025年）	43ページ 図表2-14、50ページ 図表3-1
エージェント ビルダーの概要／エージェントの構築／共有と管理	Microsoft Learn（2026年10〜11月更新、2026年11月閲覧）	作り方と共有の手順
エージェントの機能とライセンス モデル	Microsoft Learn（2026年9月更新、2026年11月閲覧）	ライセンスごとの利用範囲
エージェントを Copilot Studio にコピーする／知識源の概要	Microsoft Learn（2026年7〜9月更新、2026年11月閲覧）	Copilot Studioの機能、回答の範囲

検証の結果は、架空のデータを使い、当社のAIツールで2026年11月に1回試したものです。エージェントビルダーで動かした結果ではありません。人選の基準と育成の形は、当社の社内FDE育成プログラムの設計（2026年10月時点）を要約したものです。

当社について

Alworker

株式会社Alworkerは、経営課題の整理からAIエージェントの開発、現場に入り込む伴走、社内AI人材の育成までを一社で担う法人向けAIパートナーです。2024年7月の設立から2026年10月までに、製造・商社・IT・人材・食品など100社以上の法人に、研修・開発・伴走支援を有償でご提供してきました（当社集計）。社内FDE育成プログラム（育成3か月＋伴走3か月）は、業務部門向けとエンジニア向けの2コースで構成しています。

採点表や試算を埋めてみたものの進め方に迷う場合は、御社の題材と説明資料を30分で一緒に整理することも可能です。

ご相談: https://ai-worker.net/contact/